別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　乙　第　　号

氏　　名　多代　充

論　文　題　目

Clinical Impact of Neoadjuvant Therapy on Nutritional Status in Pancreatic Cancer

（膵癌術前治療の栄養状態への影響の検討）

論文審査担当者

主　査　　委員　名古屋大学教授　江畑智希

委員　名古屋大学教授　安藤雄一

委員　名古屋大学教授　梶山広明

指導教員　名古屋大学特命教授　中村耕三

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

今回、膵癌にて膵頭十二指腸切除術を施行した症例を対象とし、術前治療施行群と非施行群とに分けて、術前治療の周術期栄養状態への影響を比較検討した。主に術前治療前後・周術期 Rapid turnover protein（RTPs）の推移を検討し、術前治療によって RTPs が悪化し、術後の RTPs の回復も遅延するが、術後合併症をはじめ術後経過には影響しないことを確かめた。更には、Relative dose intensity の検討で、術前治療のコンプライアンスが悪い症例ほど治療により栄養状態が悪化することがわかり、膵癌治療にとっては栄養状態の維持が大切であり、術前治療症例には栄養介入することが有用である可能性が示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1.RTPs、特にレチノール結合タンパク・プレアルブミンは半減期が他の栄養指標と比較して短く、栄養状態の変化を鋭敏に表す指標とされ、実際、今回の検討でも術前治療により有意に悪化した。RTPs、特にプレアルブミンの欠点として炎症反応の影響を受けることが挙げられる。今回、術前治療により炎症反応指標の推移は一定の傾向を認めなかったことから、RTPs の推移が炎症反応の影響を受けた可能性は否定できないが、栄養状態を反映していると考える。以上のことから、今回 RTPs を栄養指標として使用したことは妥当であったと考える。

2.術前治療以外の要因、例えば病勢進行に伴う全身衰弱で栄養状態が悪化した可能性はあるが、今回の検討では術前治療を行った後、根治切除を施行し得た症例しか含まれておらず、病勢の進行のみで栄養状態が悪化した可能性は考えにくい。原病による消耗の影響も考慮する必要はあるが、今回の結果は術前治療により栄養状態が悪化する可能性を示唆していると考える。

3.今回の結果から、術前治療により栄養状態は悪化し、さらには周術期栄養状態の回復が障害される可能性が示唆された。このため、術前の栄養状態の悪化を防ぐため術前治療開始前から栄養介入を導入して、術前治療中も継続する必要があると考える。また周術期の栄養状態の回復を促すため術後も栄養介入を行う必要があると考える。これまで当科で試験的に行った栄養介入の結果を踏まえると、術前は栄養剤のコンプライアンスは比較的保たれるが、術後は経腸栄養で投与し、乳糜・下痢により継続できないケースが多かった。このため、特に術後は中鎖脂肪酸を含んだ栄養剤と成分栄養剤の併用など、栄養剤の選択や投与方法にも配慮が必要と考える。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第　　号	氏　名	多代　充
試験担当者	主査 江畑智希　副査1 安藤雄一 副査2 梶山広明　指導教員 中山淳		

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1.Rapid turnover proteinを栄養指標として使用した妥当性に関して

2．術前治療以外の要因で栄養状態が悪化した可能性に関して

3．今回の結果を踏まえて実際の栄養介入を行うとしたらどのような栄養介入を行うかに関して

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、消化器外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。

別紙3

学力審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙　第　　号	氏　名	多代　充
試験担当者	主査 江畑智希 副査2 梶山広明	副査1 安藤雄一 指導教員 中山雅弘	

（学力審査の結果の要旨）

名古屋大学学位規程第１０条第３項に基づく学力審査を実施した結果、大学院医学系研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力を有するものと学位審査委員合議の上判定した。